（第三十六号）

関東艮陵だより

東北大学関東艮陵同窓会

平成二十五年度　関東連合会総会開催

平成二十五年関東艮陵同窓会（正式には、東北大学艮陵同窓会関東連合会）は、平成二十五年六月十五日（土）東京・市ヶ谷アルカディアで開催された。

午後四時三十分からの総会の開会の辞の後、今回は本会に多大な貢献のあった神津康雄元会長のご逝去（九十四歳）に際し、押田会長よりスライドと資料で追悼報告があった。続いてご子息、神津　仁氏より死亡前後のご説明をいただいた。

その際は、奥様の静子様とご一緒に福島県の三春滝桜見学のご旅行中であったということで、出席者一同感銘を受け、黙祷した。

次いで通常の総会にうつり、押田会長挨拶（新会長一年の抱負）、岩瀬幹事長より新体制での経過報告、根本常任理事より、庶務編集担当報告、田中常任理事より女医部会報告があった。坂間会計担当幹事より会計報告、新田監事より、会計監査報告があり、会計報告と予算案が承認された。

午後五時から、大内憲明医学部長が、「東北大学医学部の現状、特に東日本大震災後の取り組みについて」と題して特別講演（下段参照）を行った。

午後六時から、懇親会に移行し、神津先生のための献杯、歓談の後、千国宏文先生（昭和四十三年卒、昭和舎出身、東京大学産婦人科入局後開業）が病後を押してテノールを披露して下さった。

昨年の総会には、神津先生（昭和十九年卒）の同級生三人が出席しており、最後に、お元気でご出席の神津先生が「荒城の月」を堂々たる美声で歌われたことを思い出した。

最後の締めの挨拶で、飯野副会長が「若手の会員を増やしたい」と決意を述べて閉会した。

大内医学部長の特別講演要旨

東北大学では、東日本大震災からの本格的復興に向けてさまざまなプロジェクトが展開されており、今回は、

（一）ゲノム情報による個別化医療を目指した「東北メディカルメガバンク機構」ならびに

（二）地域医療興支援事業の「総合地域医療研修センター」の設置についてスライドによって最新情報を熱く語った。同時に、「研究第一主義」大学として、ＮＩＨとのシンポジウムや科研費（文科省・厚労省）の推移、東北大学病院臨床試験推進センター等について紹介した。３１１大震災によって逼迫している医師不足に対し、医学部定員増などの新しい戦略についても述べた。

なお、今回の総会にあたり、大内医学部長と同期の昭和五十三年卒の多数の同級生が受付等を担当して下さり総会後大内先生を囲んで盛り上がった

東北大学艮陵同窓会　関東連合会

会長　押田茂實（文責）

神津康雄先生追悼
巨星墮つ

近藤正太郎
（昭和三十三卒）

つい先日まで、お元気なお姿を見せておられた「神津先生」が急逝された。まさに巨星墮つの感を禁じ得ない。

私が神津先生の存在を知ったのは、昭和三十年代の後半期だったであろうか。当時の私は、新編されてまだ日の浅かった「陸上自衛隊」に入隊し、世田谷にある「自衛隊中央病院」に若手の外科医官として勤務しており、そして直属の上司たる外科医長の布施為松先生は、神津先生とは旧制山形高校から東北帝大医学部に至るまで同級生の間柄であられ、色々なお話の合間に時折、同級生の方が世田谷で開業し活躍しておられる事を伺っていた。その当時から、因縁浅からぬものを感じていた。その後も年を経て、神津先生が臨床内科医会を主宰され、さらには、かの有名な「日本寮歌祭」を創生されるなど、まさに八面六臂のご活躍のご様子を見聞するにつけ、同学の先輩として羨望の眼差しで拝見していた。

そんな私が、直接神津先生にお目にかかる機会を得たのは、確かな記憶を欠くが、かなり後年の事であったかと思われる。その折に「艮陵同窓会」には努めて出席するように、そして「学士会」にも是非とも入会するようご指導をいただいた。また、東北大学は、独立学校法人になったのを機会に、全学同窓会を設立し、萩友会の名称の元に活動しており、東京の地でも、年に一回は、関東交流会を催し仙台からも総長以下の大学首脳部が揃い踏みをされ、大学の近況報告等で教授方の学術講演の企画をして会員を増やしているとのことであった。

本会の総会、懇親会では、いつも力強い挨拶されていた。

その巨星、神津先生が急逝されたことは誠に残念であり心からご冥福を祈り申し上げます。

（本会顧問）

第十五回　女医部会開催

首題の女医部会は、去る七月二十日（土）十七名が出席のもと、市ヶ谷アルカディア会館で開催されました。

今回は日本が抱える少子高齢化問題を念頭におき、堀川玲子先生（昭五十六卒）に「低出生体重児の病因・成長と代謝予後」について、ご講演をしていただきました。とても考えさせられる問題でありました。（田中佐喜子記）

東北大学萩友会関東交流会開催される

東北大学創立百周年を機に萩友会と名称を変えた旧全学同窓会関東支部会が去る七月十五日（日）午後三時より、東京・サピア・タワーで、里見　進総長（萩友会会長）以下大学首脳諸先生ご出席のもと、約四百名の参加者を得て開催された。はじめに里見総長による故神津康雄先生のご功績に対する追悼の辞に続いて「研究第一主義」「実学尊重」を学是とした東北大学の大学ランキング過去八年間第一位、進学して延びた大学過去六年間第一位の実績を踏まえて、本年百周年を記念して、「大学のワールドクラスへの飛躍のための人材の育成」「東北復興、日本新生の先導」を総長としての大学運営の基本方針とする誠に力強く、頼もしい公演があり、更に青木副学長より、萩友会の活動について紹介があった。次いで学術講演として、1913年に帝国大学として初めて女子学生を入学させた本学の百周年を記念して、二名の女性大学教官の講演があった。

次いで医学部解剖学に出澤真理教授による「Muse細胞の発見―ヒトは失われた機能を取り戻せるか」と題して、再生医療の鍵となる万能細胞について重要な問題をテーマにとりあげた講演等があった。

総会終了後、懇親会に移り、各学部同士、また他学部との懇親もあり、和気藹々の中で、午後七時半、再会を約して散会した。

（信田重光　昭二九卒）

「偉人」神津康雄先生の御逝去を悼む

信田重光
昭和29卒

本会会長を長年務められた神津康雄先生が、本年四月十六日急性心不全で逝去された。

実は、四月十八日の関東艮陵同窓会役員会に御子息　仁先生より都合により欠席する旨のお電話があった由で、会当日役員会では皆、日頃御丈夫な先生がどうされたのだろう、何か急用でもおありになったのであろう等と話し合って、まさか急逝されたなどとは思いもつかなかった。それが数日後、先生十六日御逝去、葬儀は御身内で行い、「お別れの会」を五月二九日に行う旨のご連絡を頂き、驚いたものであった。

先生は、大正八年二月二七日に長野県北佐久郡志賀村の三百六十年続く旧家にお生まれになり、御尊父は作家島崎藤村のパトロンであられた由で、名作「夜明け前」や特に「破戒」は先生の御実家に滞在中に書かれた由伺ったことがあった。

先生は東京府立五中（現小石川高校）御卒業後、旧制山形高校を経て昭和十六年東北帝国大学医学部に御入学、第二次大戦の最中であったので海軍軍医を志願、十九年御卒業時は戸塚の海軍軍医学校で海軍軍医としての教育を受けられ、直ちに軍医中尉として特攻隊基地である愛知県第二河和航空隊に御勤務、特攻隊員二十五名中十一名が訓練中事故死したのを検死された由、その後、四国５８４施設隊の軍医長に御就任後終戦になり、隊の戦後処理にあたられ御帰郷、直ちに仙台に戻られ黒川内科に御入局、内科学の研鑽を積まれて学位を受領、青森県浪岡町立病院長に就任されたが、戦後の混乱期で、左翼系の町会議員や町民の力が強く、身の危険を感じられて御退職、二九年に世田谷区若林に御開業、以後の御経歴は表（御葬儀の際に配布された由、添付）に示す通り数々の要職を占められた。

昭和二十年代後半より、三十年代頃は、東北大学医学部関東艮陵同窓会は、まだ、きちんとした集まりになって居らず、秋月先生、木村先生、津田一彦先生など昭和一桁時代御卒業の先生方が会の形を作ろうと苦心しておられた時代であった。

実は小生、昭和二十九年東北大卒業後、順天堂大外科の福田教授の教室に入局させていただいた。

当時、東京御徒町で御開業の津田先生が胃がんの患者さんの手術を福田先生に依頼されるときに、胃液酸度測定の際の胃液の沈渣を染色した癌細胞の標本を御持参になったので、福田先生も以前より、興味を持っておられたので、小生に「胃細胞診」を研究テーマとして下命され、また津田先生を御紹介いただいたので、先生のお宅で、お酒を御馳走になりながら、遊離癌細胞の基礎を教えていただいた。

丁度その頃、神津先生が世田谷区で御開業になり、津田先生が幹事長役で関東艮陵会の基礎作りをしておられたので、神津先生を頼りにされて作業を進められていた。その時、小生も神津先生に紹介され、それ以後しばしば神津先生にお目にかかるようになった。その後、津田先生や神津先生のご活動もあって、次第に関東艮陵同窓会の形が出来、黒川利雄先生の癌研病院長、松永藤雄先生の駒込病院長御就任等があって、会の基礎も出来上がり、順大精神科教授（のち理事長）懸田克躬先生（昭和三年卒）が会長、神津先生が幹事長としての御活躍により、現在の関東艮陵同窓会が完成されたものである。

小生と同級の同じく世田谷で開業した山形　昭君や小生等が時々神津先生の下働きを仰せつかったりしたが、懸田先生御逝去後、神津先生が会長として、高橋俊雄先生と交代されるまで、関東艮陵会を発展させられたものである。

また、昭和六二年、当時の石田名香雄学長より、全学同窓会設立につき、関東支部会の纏めを神津先生に御依頼があり、神津先生は関東の各学部のそれぞれ独立していた同窓会の幹事連中を糾合されて、全学同窓会関東支部を設立され、同年十一月十二日ホテル・ニューオータニで設立総会開催、初代会長に当時東京ガス会長安西　浩氏（法、昭和三年卒）を推戴、神津先生が幹事長として全体を取り仕切られ、第二回の総会で安西氏が会長を辞退後、日産自動車取締役会長石原　俊氏（法、昭和十二年卒）が会長を３～１４回、次いで神津先生が会長としての任務を引き継ぎ、第１５～２１回（平成１３～１９年）意欲的に活動をされる。

（以下、次４ページに続く）

（前3ページより続く）

そして萩友会と名称が変更されて、第1～5回（平成19～24年）と、幹事長、会長として計二十五年間、まさに四半世紀にわたり実質的に関東における東北大学全学の同窓会を発展させるため御指導下さった。心より感謝申し上げる次第である。

この間、黒川先生米寿のお祝いや、西沢潤一先生の米国電気電子工学会よりの発明王エジソンの第一回の受賞者であるＩＥＥ賞御受賞祝賀会等、東北大学全学同窓会員のみならず、全国的に先生方の御関係の方を数百名集められて祝賀会を開かれた時も。企画から会場設営、案内状発送等の裏方的仕事に御自身が足を運ばれて開催され、大成功を納められた事も、東北大学関係者を祝う母校への愛情の発露であった。

一方、先生は海軍軍医として軍籍にあられ、常に国を愛し、国を憂えるお気持ちをお持ちであった。

表に掲げられた様に、東北大学関係の諸活動のほか、我が国旧制高等学校復活の為に「日本寮歌振興会」を起こして、その会長に、また、「旧制高等学校懇話会」代表に御就任、明治、大正、昭和前半期に至る我が国エリート教育の必要性を強張して西沢潤一元総長を推戴して「日本の高等教育を考える会」の専務理事に就任されて我が国の高等教育改善に力を尽くされ、また、我が国の医療の保険制度改善のため世田谷区医師会長、東京都医師会理事、日本医師会常務理事に就任されて、その広報に従事され、アカデミズムのみを追求する日本内科学会に対して、一般内科開業医の役割を強調する為に「日本臨床内科学会」を設立して会長に就任され、また、海軍軍医の集まり、「桜医会」の、以前は海軍軍医中将がその任にあたる会長職に就任され、そして現在の医療制度のもとで必要な保険請求の書類作成や、病院運営上の経理問題に携わる等の役割の事務職を養成、教育する「日本病院管理教育協会」理事長に推挙されておられる。

これらの先生の御経歴を拝見すると、小生などその一部を垣間見るのみであるが、先生の御心情には常に国を愛し、国を憂えることによる諸問題に積極的に取り組まれ、そして各方面に歩き回って同志を集め、その事務的連絡係りをこまめに仕切られ、そして人に推されてそれぞれの組織の長になられ、何れの分野でも全力を尽くして事に当たられることが窺われ、その姿勢は我々凡人から見れば、まさに「偉人」の名にふさわしく、また、我々にとっては「偉大なる大先輩」として心からなる尊敬の念を持つものである。

先生は家庭的には良き奥様に支えられ、御子息　仁先生は世田谷区医師会の若手リーダーとして地域医療に活躍しておられる。

神津先生は、この様に東北大学や同窓会関係の興隆に多大の御貢献、御尽力をされ、その御功績は、東北大学関係者の間では知らざる人無き存在でいらっしゃった。五月二十九日に渋谷「水交会館で行われた「お別れの会」には五百名に近い各界関係の方々が集まられた。

先生の一生は上述の人生観による、国の行き方を憂え、それを改善せんとするまさに、憂国の士的活動に貫かれたものと思われ、まだまだ残された仕事も多いものと思われ九十四歳の御逝去は早すぎるものと惜しみても余りあるものである。

生前の御指導に心より謝意を表し御冥福をお祈り申し上げる次第である。

合掌

（筆者　信田先生はは本会顧問）

神津康雄先生　御年譜

大正8　長野県北佐久郡志賀村生まれ
昭和11　東京府立五中卒業
同16　旧制山形高等学校卒業
同19　東北帝国大学医学部卒業
同29　東京世田谷区で開業
同39　日本寮歌振興会委員長
同52　世田谷区医師会会長
同54　東京都医師会理事
同57　日本医師会常任理事
同61　東京都各科医会協議会会長
平成1　日本臨床内科医会会長
同5　東京校歌祭会長
同9　日本の高等教育を考える会専務理事
同11　海軍桜医会会長
同14　日本寮歌祭会長
同16　日本病院管理教育協会理事長

会費納入のお願い

本年度（平成二十五年度）会費三千円を同封の振替用紙により納入ください。

東北大学艮陵同窓会
関東連合会東京支部
〒247-0072
神奈川県鎌倉市岡本
二-二-一-七〇四
TEL　&　FAX
〇四六七（四五）〇二八七